小学校におけるハンドボールの教材化
－技能の向上を促す指導を中心に－

千葉　智恵（1502049）

＜序論＞

研究動機・研究目的・研究方法

小学校新学習指導要領の取り扱いの中で、ハンドボールが「加えて指導できる」ボール運動として導入された。そのことについて著者は、小学生の段階でハンドボールをやるのは困難ではないかと思った。ハンドボールは走る、投げる、捕るなどの様々な動きを伴い、ルールも難しいからである。

しかしそれは筆者がプレイヤーの立場に立った見解であり、指導者の立場に立ち、ハンドボールを教材として捉えると、非常に多くのメリットがあることがわかった。ハンドボールの楽しさとは、シュートを決めることであると筆者は考えている。シュートを決めるためには、ボールを捕る、投げるという基礎技能の習得が不可欠である。そこで筆者は、技能を向上させるための教材づくりはどのように行われるべきか研究してみたいと考えた。

本研究では、小学校におけるハンドボールの教材化に関する理解を深め、子どもの技能を向上させるために、どのような教材づくりをし、その中でどのように指導すべきかを明らかにするということを目的とする。

ハンドボールを授業で実践している小学校の実践報告をもとに、技能の向上を促すと考えられる教材を工夫して行っている事例をまとめ、分析していくという方法を用いて、本研究を進めていくこととする。

＜本論＞

第一章　　ハンドボールの特性論

ハンドボールの教材化を考える上で、ハンドボールという競技の特性をとらえなくてはならない。本研究では、小学校での体育授業としてハンドボールを導入し、技能の向上を促すということが主眼となっているため、ハンドボールの教育的特性と技術的特性をとらえる必要がある。

（ハンドボールの教育的特性）

ハンドボールには、次のような教育上のメリットがある。

- 全身の運動を保障し、特に上肢のスローはほかの運動に見られない。
- 攻守混在型の特徴を有し、空間やタイミングの認識の形成が可能である。
- 他のボールゲームに比べボール操作が簡単である。
- ルールも簡易化しやすく、工夫すれば人数も幅広く対応でき教材として柔軟性がある。

（ハンドボールの技術的特性）

ハンドボールの競技特性から必要となる技術には、以下の点がある。

- ゴールから６m以上の距離からの強いシュートが打てるオーバースローの技術。
- 至近距離から遠い距離までのスローの技術。
- ランニングの状態でのパスやキャッチの技術。
- シュートやパスを阻止したり、ボールをとる技術。

ハンドボールを体育教材として扱う際に、留意しなければならないことは、競技としてのハンドボールをただ単に簡易化・単純化した指導にとどまってはならないということである。教育目標を明確に示し、それを達成する手段として「教材」が存在するのである。

第二章　　教材の概念と運動発達の概念

授業でハンドボールを取り入れる際、ハンドボールという競技は「素材」として位置づけられる。「素材」を加工することで「教材」となるのである。つまり、「何を教えるか」＝「学習内容」であり、「何で教えるか」＝「教材」と捉えることができる。また、運動を楽しむためには最低限度の能力が必要であり、そのために下位教材の開発が不可欠である。

教材化にあたり、その対象となる子どもの運動発達段階を考慮することも重要である。マイネルの運動発達論では、「低学年期」の特徴は、「活発性」に基づく「運動浪費」がみられるということ。「高学年期」では、全身的巧みさ・部分的巧みさが向上し、習得力にすぐれていることが挙げられている。

第三章　小学校での実践例の考察（技能の向上を促す下位教材を中心に）

ここでは、ハンドボールの授業を実際に行った小学校の実践例の中から、技能の向上を促すと思われる下位教材を抽出して、検証を行った。その結果、技能の中でも特に投能力の向上をねらいとした「ドリルゲーム」が多くの学校で取り入れられていることがわかった。「ドリルゲーム」とは、「本来ゲームではないが、練習内容をゲーム化したもの」である。それぞれの小学校で子どもの実態に合わせて、用具や場作りを工夫し、的当てゲームやパスゲームなどを行っており、楽しみながら基礎技能の向上が図れるようになっていた。実践例のなかには、このような下位教材の導入によって、授業の始めの時期と、後半の時期を比べて子どもの投能力が向上したという報告もあった。

第四章 運動発達をふまえた技能の向上を目的としたハンドボールの教材化

最後に、子どもの運動発達を考慮し、また実践例の下位教材を参考にしながら、小学校の低学年・高学年それぞれの段階について学習指導計画を考案した。この授業では、「技能の向上」が一番のねらいである。ゲームだけを楽しく行っていても、技能は身につかない。やはり、運動発達段階をふまえた適切な下位教材の導入と教師による指導が不可欠となる。

低学年では、授業の始めにウォーミングアップをかねてボール操作や鬼遊びを行って、手でボールを扱う感覚や、空間や周りの人との位置関係を意識しながら動く感覚を経験させるようにする。そして徐々に、投・捕の技能、ドリブルの技能などの基本を身につけていく。後半は簡易ゲームを行い、動きが身についているかをよく観察する。（資料１参照）

高学年では、投げるフォームの習得に目標においた学習内容となっている。高学年になってくると、これまでの運動経験の違いなどによって、技能面での個人差が生じてくる。実践報告においても特に男女差が顕著であるという指摘があった。そのことをふまえて、ボールを投げる際の、腕や腰の使い方、足の踏み出し方を段階的に指導するようにする。そして、投げるフォームが形成されたあとでステップシュートやジャンプシュートなどのシュートの練習をしていく。ここでは、自分の能力に応じて徐々にスキルアップができるような練習教材を取り入れた。高学年でのゲームは正規のゲームに近いかたちで行うが、ルールや人数は様子を見て柔軟に対応するようにする。（資料２参照）

＜結論＞

ハンドボールを教材化する上で重要なことは、教育的特性・技術的特性を捉えること、教材について理解すること、そして運動発達段階を考慮しそれに見合った下位教材を導入することだということがわかった。

教師の指導面に関しては、子どもの動きを常に観察しながら、一人ひとりの技能面でのつまずきに気づき、運動の修正を行うことが重要である。できないことができるようになると運動が楽しくなってくる。子ども達が互いに向上していき、上達度を評価し合うことによって、新たな人間関係が築かれる。技能の向上を通して人格形成が可能であり、非常に教育上のメリットが高いといえるのではないだろうか。

今後の課題としては、大学卒業後教師となって、第四章で示したハンドボールの学習指導計画をもとに実際に授業を行って、本当に子ども達の技能（とりわけ投能力）の向上が見られるかを検証し、改善すべき点などを見つけていきたい。

（引用・参考文献省略、資料参照）